第４回コミュニケーション・キャンプ実施報告

平成15年度１年次会
阪本康之　岡　聖美　深澤孝之　建元喜寿　川上有正
石井克佳　杉村祐美子　鈴木正徳　剣持智恵

本校におけるコミュニケーション・キャンプは今年で４回目を迎えた。これまでの反省点を見直しさらなる充実を図るために，今回は特に「創作活動の充実」にポイントをおいた。本報告はコミュニケーションキャンプにおけるアイスブレーク，マウンテンバイク，プロジェクトアドベンチャー，エコハイキングのそれぞれの活動報告，実施後の教員側の活動に対する考察・生徒のアンケート結果をまとめたものである。

キーワード　Nice Try!　コミュニケーション能力　創作活動　課題解決　人間関係

Ⅰ．はじめに

現代の社会は，よりよい人間関係の構築に不慣れな生徒を多く生み出しているのではないだろうか。多くの人の中で自己を見失うことなく，自分の考えを的確に人に伝え，コミュニケーションする能力を養うことは，現代社会で生きていく上で必要であり，総合学科における一つの目標でもある。入学直後の１年生にとってコミュニケーション・キャンプは，将来社会人となったときを擬似的に体験するよい機会になると考えられ，その重要性は計り知れない。

本校におけるコミュニケーション・キャンプは今年で４回目を迎えた。これまでの反省点を見直しさらなる充実を図るために，今回は特に「創作活動の充実」にポイントをおき，インストラクターとの事前調整に尽力した。

Ⅱ．目的

新入生の生徒間，教師とのコミュニケーション能力を育て，新しい学校生活のスムーズなスタートを促す。また「コミュニケーション能力の育成」を目指した様々な体験を通して，学習活動や日常生活に対して前向きに取りくむための基礎を作る。

Ⅲ．各活動の振り返り

１．日程について

	4/10（木）	4/11（金）	4/12（土）	4/13（日）
6:00		起床 外気浴 整理・整頓	起床 外気浴 整理・整頓	起床 外気浴 部屋整理
7:00		朝食	朝食	朝食
8:00	ＨＲ	準備	準備	荷物整理

	8:30 出発 バス ↓	8:20 集合	8:20 集合	
9:00	自己紹介 (1)	野外活動 Aマウンテンバイク BPA/エコハイキング	野外活動 Aトレッキング Bマウンテンバイク	
10:00	休憩 自己紹介 (2)			
11:00				
12:00	到着 昼食			昼食 昼食後1:00まで 荷物の確認
1:00	アイスブレーク			出発式 記念写真撮影 バスに乗車
2:00				出発
3:00				
4:00	アイスブレーク終 ホテル着	帰着 自転車掃除 ミーティング	帰着 自転車掃除 ミーティング	
5:00	入室 係打合せ	入浴 休憩	入浴 休憩	学校着 解散
6:00	夕食	夕食 テーブルマナー講座を行いながら食事をします	夕食	
7:00	夕食終了 7:15 講義 総合学科とは 産業社会と人間 学校生活全般 ２部9:00まで		夕食終了 7:15	
8:00		夕食終了 8:15 産業社会と人間		
9:00	講義終了 (入浴～9:50)	9:30 授業終了	9:30 終了	
10:00	日誌の記録 就寝準備 10:15点呼 10:30消灯 就寝	日誌の記録 就寝準備 10:15点呼 10:30消灯 就寝	日誌の記録 就寝準備 10:15点呼 10:30消灯 就寝	
11:00				

全体の日程については，特に問題はなかったと思われる。

第２日目夜に講義を取り入れたところ，講演者のホテル支配人によるソフトな語り口と仕事に対する情熱がよ

く伝わり，生徒たちにも好評であった。第１日目の副校長の講義も含め，95分という講義時間は長いのではないかという意見もあったが，人の話を聞く力を養うことも重要であり，そのためにも必要な時間である。

第３日目夜の「創作活動１」は，予定時間よりも30分早く終了した。教員側が意図していた内容がインストラクター側に的確に伝わっていなかったことがその理由としてあげられる。また，片づけを思慮に入れても良かったのではないかと思われる。

第４日目の「創作活動２」における縄跳び・カレー作りに配分した時間は妥当であった。最後に友人10人を見つけて色紙に一言書いてもらう時間も十分に取ることができた。

コミュニケーション・キャンプ第２回目(平成12年度)と同様に用意した日程を印刷した小さなメモ用紙は，生徒の自主的な活動を促していたようである。

２．アイスブレークについて

（１）実施内容

アイスブレークは１日目（４月10日）黒姫到着後すぐに実施した。往きのバスはクラスごとの割り振りであるため，活動班ごとの取り組みは，このアイスブレークが初めてとなった。 160名の活動から，１班10人の活動班での取り組みまで，様々なプログラムが組まれていた。

アイスブレークのプログラムは，主に次のような内容であった。

① ２人組→４人組→８人組→16人組
それぞれ協力し合って立ち上がる。

② ネームトス

③ ピンポンを転がそう・・・半分に切られたホースの上でピンポンを転がすゲーム

④ ボールタッチゲーム・・・いかに早く全員が１つのボールにタッチできるかを競うゲーム

（２）考察

アイスブレークの内容は，前回のときとプログラムが変わっていて良い内容だった。少ない人数から始めることで，コミュニケーションをとることに身構えていた生徒も，心に少し余裕が出来たと思われる。ネームトスへとスムーズに入れた。以降は活動班ごとの活動になったが，プログラム自体はみんなで協力し合ってやるというとても良い内容であったにもかかわらず，班ごとの盛り上がりに差がでてしまった。考えられる原因としては，インストラクターの人数不足が考えられる。２班を１人で見ているところは，どうしても活動が停滞してしまった。

また，教員はプログラムに参加するべきかどうかという疑問も残った。生徒理解という観点からいくと一緒に混じってやるべきなのであろうが，教員がグループにいると，インストラクターも教員をあてにする場面もあり，生徒が伸び伸びと活動できないのではないかという印象も持った。後半の活動において，生徒だけで話をする時間がより多くなれば，アイスブレークのプログラムとして，より良いものになっていくと感じた。

３．ＰＡについて

（１）実施内容

ＰＡはキャンプ２日目（４月11日），３日目（12日）に実施した。半日単位でＰＡとエコハイキングを入れ替え，半日について４班，一日８班，二日間計16班，160名で行った。当初，野外での活動を予定していたが，３日目は雨となったため，体育館で行われた。

ＰＡのプログラムは次のような内容であった。

（１）蜘蛛の巣くぐり

（２）板渡り

（３）板での島渡り

（４）ロープでの島渡り

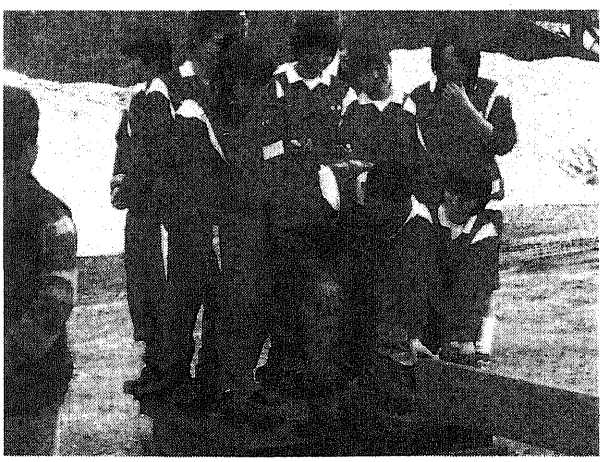
（５）ナイトウォーク

（2）考察

今回のＰＡについては，プログラムが以前から改良され，良い内容であった。班全員の相互の協力，そのためのコミュニケーションを必要とする内容が多く，またどのようにすればクリアできるか考える時間も十分にあり，すぐに答えを求める傾向の強い最近の生徒にとって，とても良いプログラムであった。プログラムをクリアするために，自然と生徒同士で会話が増え，コミュニケーションをとり，生徒相互での役割分担が図られていった。この「自然と」ということが，とても重要である。男子が率先してプログラムに取り組んでいた印象が強く，男子・女子の協力もよくでき，協調性やお互いを認め合うことにもつながった。

１つのプログラムをなかなかクリアできない班もあった。生徒によって，あきらめずに最後まで何とかしようという者と，徐々に意気が低下してしまう者がいた。クリアした時も，達成感を得られた生徒と，解放感のほうが強かった生徒が見受けられた。この点は，インストラクターの力量にかかってくることである。

２日目にＰＡ・エコハイキング，３日目にマウンテンバイクという班と，その逆で２日目にマウンテンバイク，３日目ＰＡ・エコハイキングにという班があるわけだが，前者の方が，コミニュケーション・連帯感という点では



プログラムが系統的に生かされてる。

４．ＭＴＢについて

活動の概要としては、野尻湖畔約30kmのコースを、10人ずつの班行動で走行する、というものである。コース中には急坂道もあるが、走行速度は個々人の体力や状態に応じ、班ごとに決定されるため、完走には体力よりも気力が要求される。活動の目的も、ＭＴＢ体験や体力の育成ではなく、課題への挑戦や達成を通じて生徒相互のコミュニケーションを促進することにある。

今回のＭＴＢを通じて、いくつかの課題点が明らかになった。以下に3点を述べていきたい。

（1）活動の目的について

上述の通り、ＭＴＢの目的は生徒相互のコミュニケーションを促進することにある。しかし、実際には、同行する仲間と励まし合い、ゴールを目指す、といった風景はあまり見られず、ＭＴＢが参加者各人による個人活動になってしまった感も否めない。また、前年度までと比して、最後の急坂道で自転車を降り、押し歩いて上る生徒が多かったが、その点からも、班全体および個人の活動目標の明示と活動に対する動機付け、インストラクターの活動目的に関する理解の徹底、単なる長距離走行ではなく「ＭＴＢを通じてのコミュニケーション促進を主眼とした活動」の検討、といった点に課題が残された。

（2）安全管理について

今回のＭＴＢコースは、野尻湖畔の眺望を望むこともでき、生徒に自然の景観美を示すことができた点では、良い設定であった。しかし一方、班行動による団体走行は、見通しの悪いカーブや交差点において、時折危険な場面を生み出してしまった。安全面から見たコースの検討をする必要がある。また、加えて、生徒への交通安全指導、インストラクターとの安全確保に関する協議の徹底、走行班の人数の検討など、安全確保のための取り組みを強化する必要がある。

（3）病人や事故への対応について

今回の活動中、鼻血を出した生徒がいた。出血はなかなかおさまらず、病院をいくつか回ることとなった。偶然、ＭＴＢインストラクターの中に看護士がいたため、適切な応急処置を受けることができたが、看護士の同席という僥倖を頼りにせず、教員・インストラクター・ホテルの三者による病人や事故発生時の対応を十分に準備しておく必要がある。具体的には、病人や事故発生時の連絡のために、コース中の地名や病院の電話番号を周知する、緊急時の連絡手段（携帯電話、トランシーバーなど）を確保しておく、といったことであろうか。

5．エコハイキングについて

（1）目的

自然の雄大さ，美しさを体験し，人が環境と調和して生活することの大切さについて考える。

班行動を通して，生徒相互のコミュニケーション能力を高める。

（2）事前準備

事前の打ち合わせは，短時間に終わったが，リーダーの秋山恵生氏よりＢ５版２ページの資料をもらったため，これをもとに計画を立てた。内容は，①雪上ハイキングの特徴　②森に棲む野生動物の足跡　③枝に表れた模様(葉痕)　④注意事項　であった。資料はカラー写真も含まれており，大変見やすくできていた。これを生徒のしおりにも綴じ込んだ。

（3）当日の状況

第２日目，第３日目に分かれてエコ･ハイキングを実施した。黒姫の春はまだ遠く，スキー場はリフトの営業を終了しているものの，ゲレンデは雪が深く滑走可能な状況である。天候は，第２日目は曇りときどき小雨，第３日目は雨だったため薄暗かった。エコ･ハイキングは，静まり返ったスキー場内を黙々と歩くことから始まった。各班生徒１０人にインストラクター１人の構成であった。インストラクターの職業はペンションのオーナー・林業など様々であるが，黒姫の山に関わっている人ばかりであるとのことであった。そのため，ハイキングの道すがら生徒が体験した内容は，インストラクターの個性に応じて班ごとに異なっていた。ある班は，植物の観察に時間をかけ，別の班は樹木の高さを測定し，小道からはずれて雪の中を入っていく班もあった。

（4）引率した教員の評価

・私の班のインストラクターは，とくに問題はなかったですが趣味の延長でやっているという感じで，「これは？科のなんとかで・・・」と，高校生には難しすぎる発言が結構ありこちらも，コミキャンを考えたものをもう一度確認していかなければという感じでした。

・あるインストラクターは先を急いで遅れた生徒を取り残してしまった。生徒には自然を満喫したという充実感よりも，雪の中を延々と歩かされたという疲労感しか残らないだろう。コースを歩くこと自体が目的ではなく，生徒同士がコミュニケーションを取り，まとまっていった場所が自然の中であったという体験ができるようなプログラムを求めたい。教員側はこの点について，インストラクターに周知徹底しておく必要があった。

・教員はどのように参加すれば良かったのだろうか？
今回のコミキャンでは考えさせられた。

・雪の中での自然を知るということでは良かった。
小川を飛び越えるところとか（女の子が１人はまった），ゲレンデの石の所で写真をとるときなどみんなでまとまっていた。

・何がエコなのか，わかりにくかったと思う。雨がひどかったので，ただ黙々と決められたコースを進んだだけだった。インストラクターによる違いはよく分からないが，ＭＴＢ同様，コミュニケーションをとるというこちらの趣旨と，インストラクターとの認識に差があったように思う。

・インストラクターの力量の問題。ＭＴＢでも書いたが，エコ・ハイキングそのものが主ではない。その認識と，実行ができたかといえば，疑問が残る。数人に対してだけ説明等をし，あとの生徒は勝手に先に行ってしまっているという光景が見られた。グループ内で感動を共有できるようにして欲しい。

・エコ・ハイキングが主ではないとかいたが，生徒にとっては普段できないような体験であり，その点では，こういうのもありかなぁと思う。

・班によってする事が違うのがいいのか悪いのか判断できないが，疑問を感じるのも事実である。

・当日の様子や，写真などから見ると生徒の表情は生き生きとしていた。寒い中ではあったが初めて雪山を歩く生徒が多い中で，楽しみながら参加していた。

（5）まとめ

①事前準備について

秋山氏から出された資料がわかりやすくできており，実踏の際に現地に足を運んでいたため，事前の打ち合わせにあまり時間をかけなかった。しかし，当日の天候や生徒の状況によってどのような対応が必要かについて検討する必要はあった。たとえば，教員の評価の２番目にあるように，隊列が乱れた場合の対処の仕方等については徹底が必要である。

②インストラクターによる雰囲気の違い

インストラクターは従事している職業が様々であるが，いずれも黒姫の山や森林・自然に関わっている人たちである。行程(ルート)はすべての班が同じではあるが，途中の内容はそれぞれに工夫を凝らしていたと評価してよいのではないか。

③生徒同士のコミュニケーション

歩きながら，班の中で生徒同士のコミュニケーションがどう図られていたのかがよくわからない。黙々と雪山を歩くだけでなく，もう一歩踏み込んで生徒に話をさせたり，短時間でも作業をさせて，生徒同士のコミュニケーションを高めていくことは必要だったのではないか。

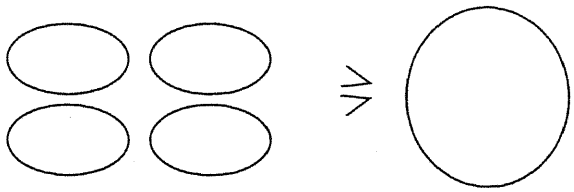
④最後に

天候に恵まれなかったこと，多少の冒険やトラブルがあったことを除けば，エコ・ハイキングは事前の計画通り実施できたと評価する。今後の課題としては，この活動を通じて生徒同士のコミュニケーションがどうかわるのか，各インストラクターの個性を活かしつつさらに内容を充実するにはどうすればよいかの２点を今後の検討項目とする。

６．mission impossible＜その１　３日目の夜の活動＞

学校の戻れば多くの時間、クラス単位で活動することになるため、コミュニケーションキャンプの終わりにクラスの中のコミュニケーションを図るという目的で、３日目の夜から４日目の午前中にかけてこの活動を企画した。今回のコミュニケーションキャンプではＰＡの要素を多く取り入れ、それをキャンプの活動の柱と位置づけていた。その流れの中でＰＡ的な活動を通して、目的が達成されるような内容はどのようなものにすればいいのか、何度も検討を重ねた。課題解決型の活動という点では、早い段階からまとまっていたのだが、具体的な活動の内容になるとなかなか話が進まなかった。初期の活動のイメージは以下のようなものである。

クラスを小グループに分け
それぞれのグループが与えられた
課題を解決する



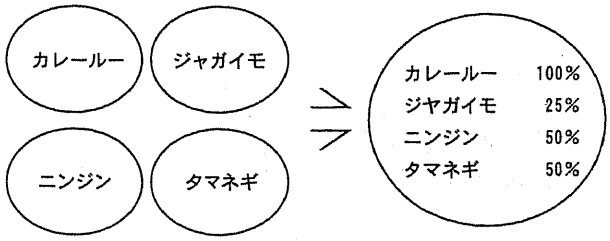
それぞれのグループが課題を解決した結果、クラスの課題が解決する

話し合いの中で、カレー作り（飯盒炊爨）をこの活動に合うよう形を変えて実施してみてはどうかという意見が出され、以下のように活動内容を組み立てた。

＜班別課題＞

各クラス４班に分け
次のような役割を与える

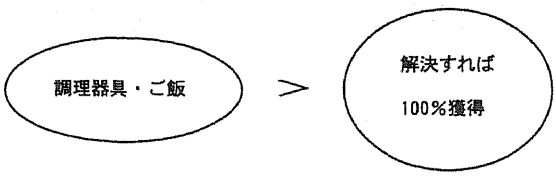
それぞれの班の課題達成度に応じて獲得できる量が決まる



※課題達成度は今回の場合、課題をクラス対抗としその順位で獲得量を変化させた。
ただし、カレールーについては課題を解決したら１００％与えることとした。

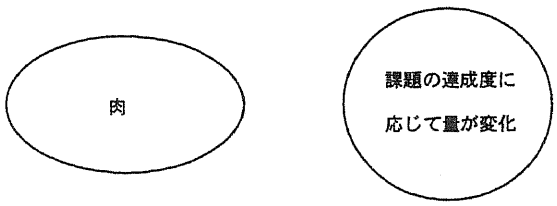
クラス全体で取り組む課題を解決することで、調理器具、ご飯、肉を獲得できるようにした。

＜クラス課題①＞



○比較的容易な課題（４０人で取り組む）

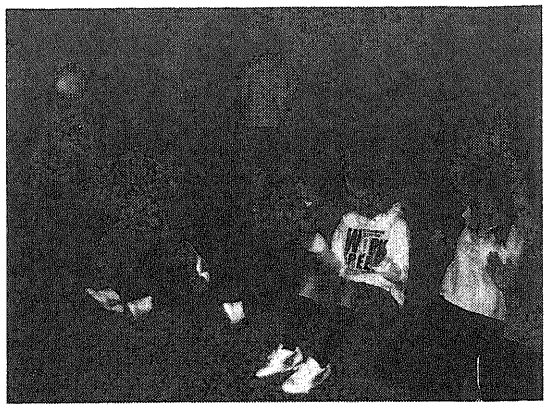
＜クラス課題②＞



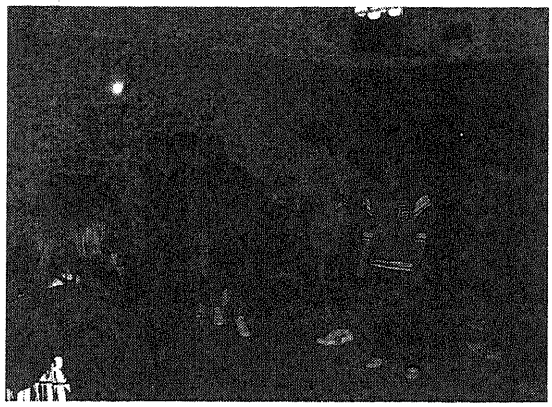
○課題は単純でわかりやすく、クラスのコミュニケーションが図られるもの

３日目の夜の活動は、＜クラス課題①＞と＜班別課題＞を行った。教員の中での話し合いでは課題解決型の活動について相当するアイデアが出なかったので、キャンプの中で　ＰＡを担当してもらった内田氏に実踏の段階で相談した。ＰＡの中でも同じような活動を行っておりノウハウもあるということだったので、３日目の夜の活動についても内田氏のグループにインストラクターおよび企画をお願いした。

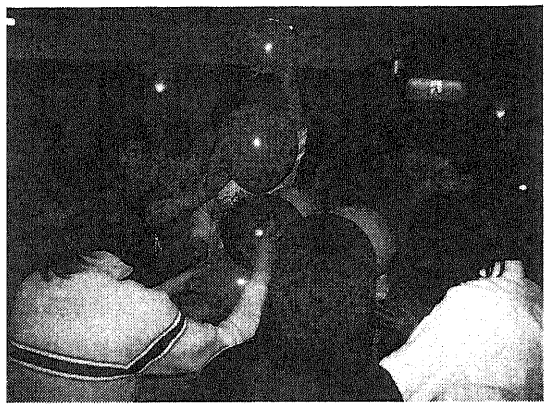
クラス全員人間イス



伝言ゲームの様子



地雷あての様子



風船の塔作成の様子

活動は<クラス課題①>→<班別課題>という順序で行われた。活動の具体的内容は次の通りである。

		課　　題	対応する食材
クラス課題①		クラス全員「人間イス」	調理器具 ご飯
班別行動	1班	伝言ゲーム	ジャガイモ
	2班	風船の塔	ニンジン
	3班	爆弾処理	タマネギ
	4班	地雷あて	カレールー

クラス課題①については初めてのクラス活動ということもあって、はじめのうちは生徒も戸惑っていた面もあるが、少しずつ声をかけ合いながら早いクラスだと10分程度で完成した。それぞれのクラスにインストラクターが一人ずつついて指導を行った。班別課題の方が控えており、時間も気になったようでインストラクターが具体的に指示を出して成功したという様子だった。もう少し時間をとって生徒達がどうすれば成功するのか考えさせてもよかったのではないだろうか。

班別課題は各クラスからそれぞれの課題に取り組むメンバーが4つの場所に集まって、いっぺんに活動が始まった。申し合わせの段階では1つの班が活動している様子を他の班が見学し、クラスの応援ができるようにするということだったのだが、教員側とホテル・インストラクターとの理解が十分ではなかったようで、このような形での活動になった。ここではじめてクラスの取り組みになったのだから、クラスへの帰属意識高揚のためにもクラスを応援するという形での盛り上がに期待したかった。

インストラクターが割と冷静で活動が「粛々」と進んでいったという印象もあり、もう少し盛り上げてくれる配慮があればもっとよかったのではないだろうか。ただ、このインストラクターの費用についてはＰＡの延長ということで内田氏の好意によって無料で行っていただいたという点も認識しておかなければならないだろう。

３日目夜の活動は全体的に生徒の活動後の反応はよく、翌日の活動に対するモチベーションも上がったようである。積極的に関わろうとせず、部屋の隅から様子をうかがうという生徒も１割～２割出るかもしれないと考えていたが、そのような生徒はほんの数名程度でほとんどの生徒は真剣に取り組んでいた。

生徒の中には「活動班は楽しくていいが、学校に帰ったらクラス単位での活動になるのに、クラスの活動がないのはどうしてかなと心配していたが、この活動でクラスのコミュニケーションをとることができたのでよかった」と感想を書いている者もいた。

内田氏の企画書が送られてきたとき、カレールーにつ

いても順位によって 100%、75%、50%、25%と量が減るようになっていたので、これでは最下位のチームはカレーにならないということで、ルーについては獲れるか獲れないかにしてくださいと、ホテルを通じて申し入れてた。しかし、この内容は伝わっておらず当日になってインストラクターに急遽変更してもらった。前述した活動の進め方にしても、新しいことをはじめるにあたって教員、ホテル、インストラクターとの連絡調整がうまくいっていなかったことは大いに反省し、今後このようなことがないように気をつけなければならない。

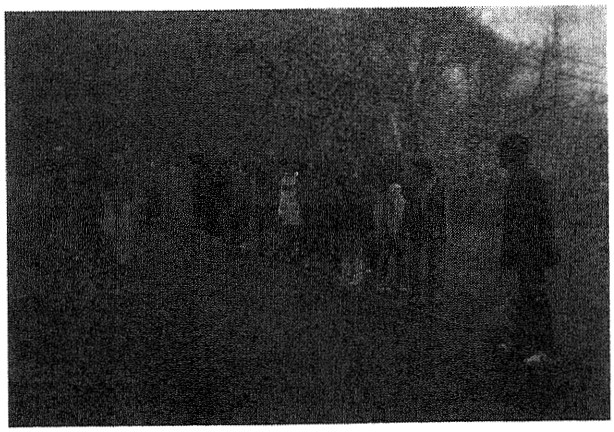
＜その２　４日目の午前中の活動＞

（１）クラス課題②　長縄跳び

最終日のプログラムの1番目に、カレーの具となる肉を獲得するミッションとして、肉争奪長縄跳びを行った。配分は連続してとべた回数×100ｇ（最高連続20回まで）とした。ボーナスとして10回連続して飛べた場合、ジュースをクラス全員分、また最初に連続して30回飛ぶことのできたクラスには高原アイスを用意した。

石井教官の提案から長縄跳びを行うことになったが、クラスのコミュニケーションをはかるうえで非常に有効なプログラムであったと思う。若干名、飛ぶことに意欲的でない生徒がみられたが、ほとんどの生徒が力をあわせ取り組むことができたと思う。回数を多く飛べることも重要だが、本プログラムの目的は、クラスで協力しあって長縄という問題を解決していくことにあった。各クラスで協力し合いながらすすめていたことはすばらしかった。体育祭では、結果があまりでなかったが、なかにはコミキャンを思い出しながら体育祭に取り組む生徒もおり、効果があったのではと思う。

朝は、ホテル前の駐車場に水がたまっていたが、ホテル側に水はき作業を行っていただきよいコンディションでできたことを感謝したい。



長縄跳びの様子

（２）カレー作り

カレー作りも順調にすすんだ。具の配分は、見た目にも本当に具の配分に違いがあるということが生徒によくわかり、「この学校はやるといったことはやるんだ。」ということが伝わったのではないかと思う。このことは家庭で話題になっている生徒もおり、話題作りにもなった。具材が少ない班もあり心配したが、各班ともカレーとしては普通に食べることのできる程度のものに仕上がった。ただ、調理の途中でガス漏れがあり、危険な状態になりかけたところがあった。器具の使用には十分注意したい。

反省点として、ホテル側との連絡がうまくいかず、パックジュースを全員分お願いしていたにもかかわらず、コップにお茶を入れることになったことがあげられる。こちらとしては、ボーナスとしてはっきりわかるよう、また、そのときに飲めない生徒は持ち帰られるようにとのことで要請していたが、ホテル側が予告なく変更していた。このため、再度、前日の打ち合わせで変更していただいた。この4日間全般にわたっていえることだが、お互いがわかりあっている関係となってきたため、一種の緊張感が薄らいできていることには注意が必要であると感じた。

カレーを食べる様子

（３）色紙書き

色紙書きは、160人全員が1枚づつ色紙をもち、最低10人（異性をかならず５名いれること）から色紙にコメントをかいてもらう形で行った。このプログラムの目的は、友人とコミュニケーションをはかること、４日間の振り返りを行うこと、そしてコミキャンに行ってきたということが形に残るものを生徒にもちかえらせ、ことあるごとに入学当初の初心を振り返らせることにあった。いいかげんに10名あるいはそれ以下でごまかすのがいるかと

思ったが、真面目に取り組んでいた。色紙一杯に書いてもらっている子もいた。なかにはなかなか友達に話し掛けることができず、戸惑っていた生徒もいたが、それもひとつの経験になったのではと思う。

この色紙が今後どのような意味合いをもつかわからないが、将来、高校生活に悩んだ時など、家の片隅にかざってある色紙をみて、「あのときの気持ちを思い出してがんばろう。」という気持ちを起こさせるものとなれば幸いである。

色紙を書く様子１

色紙を書く様子２

（4）4日目のプログラム全体を振り返って

なによりすばらしかったことは、最後まで生徒が一生懸命取り組んでいたことである。こちらが用意したプログラムが成功するかどうかは生徒にかかっていた。しらけず、手をぬかず一生懸命取り組む姿に、本学年団の未来を感じた。この、生徒の一生懸命さひたむきさを教員集団が殺ぎ落とすことなく、いいかたちで伸ばせていけるように頑張っていきたい。

Ⅳ．保健関係報告

１．事前の健康相談

４月３日（物品購入日）に行う。７件の相談があり，事前打ち合わせ時に，保健調査のまとめと共に引率者に報告した。

２．キャンプ中の保健室利用者

のべ２７人が利用した。詳細は以下の通りである。

頭痛：２，　腹痛：４，　胃痛：１，アレルギー？（唇の腫れ）：１，

すり傷・切り傷：５，腰痛：６，捻挫：５，打撲：２，鼻出血：１

このうち，医療機関受診者は１名であった。

詳細・・鼻出血（朝，鼻出血したので止血して様子を見る。止血したのでマウンテンバイクに参加。途中で再び鼻出血した。止まらないので病院へ）

３．健康観察票

毎朝全員に提出させた。

健康状態の悪い生徒については，朝食後，個別に健康観察を行った。

４．保健関係についての引継事項

（1）インストラクターとの打ち合わせ用に，生徒の健康面をまとめて持参する。

（2）最寄りの医療機関名と電話番号をしおりに掲載する。

（3）ホテルで氷をもらうとき，適当な大きさのビニール袋を持参したほうがよい。

（ホテルの袋は大きくて，水漏れもよく起きるので）

５．気付いたこと

○救急体制について

医療受診について，生徒の自宅には学校（教務）から連絡を入れてもらうという指示があったが，引率者が保護者に状況や症状，受診結果などを直接説明した方がよいのではないかと思われる。そのためにも，連絡方法など事前に把握しておくべきであろう。また，救急連絡体制についても確認が必要である。

Ⅴ．アンケート結果

実施後，アンケートを行った。結果は資料１の通りである。

アンケート結果から見ると，「行ってよかった」と回答した生徒が90％近くを占め，キャンプ実施４年目となった今回も生徒の印象はよかった。

キャンプ前は「できれば行きたくなかった」と思っていた生徒が半数を超えており，入学式翌日からの行事に

大変な不安を抱いていたことが伺える。親元を離れることもあるが，何よりも，先生も知らず，友達も会ったばかりという人間関係の中での３泊４日に対しての不安が大きいのであろう。このキャンプの目的は「コミュニケーション作り」であり，最初の活動「アイス・ブレーク」で緊張をときほぐし，続く「プロジェクト・アドベンチャー」でグループ活動を通して人間関係を築いていくことをねらっている。それぞれ70％の生徒がこれら２つの活動を「良かった」と感じており，不安の解消，充実感・達成感を得るのに十分役立ったことを読みとることができる。

今回は「創作活動」にポイントをおき，学年全体の人間関係からＨＲの人間関係へうつる過程を重視した。これに対して80％近い生徒が「良かった」と回答した。インストラクター側と教員側の連絡の不徹底で，十分に機能しなかった面はあるが，創作活動の様子が後の保護者会や面談でもよく話題となったことから，生徒たちは創作活動に満足し，ＨＲへスムーズに帰属していくことができたと思われる。

Ⅵ．おわりに

コミュニケーション・キャンプも実施４年目を終え，活動内容・指導方法は洗練されてきていると考えられる。しかし一方，慣れによる一種の甘えも散見され，見直しが必要な時期にきていると考えられる。

慣れは恐ろしい。こうすれば無事に始まって無事に終わるだろうという予測がつき，まずまずの結果が出てしまうからである。今回は創作活動に関しては非常に気を遣ったが，果たしてその他の活動はどうだったろうか。インストラクター側も普通の校外学習と同じでルーチンワーク化しているような感があった。コミュニケーション・キャンプを取り入れた当初は，毎日，インストラクター（特にＭＴＢは全員のインストラクター）との事前打ち合わせ及び反省を行っていた。今回はインストラクターの代表と次の日の確認をしたのみであり，インストラクター全員に打ち合わせ事項が伝わっているかどうかも疑問だった。すべての活動に関して，「何のために何をする」か，教員側も今一度確認する必要性を感じた。今回の場合、活動の方向性を見失った時点で，インストラクターと教員の双方が，十分な理解と合意に立てれば，軌道修正も可能であったのではないかとも思われる。

また，ホテル側と教員側との意思疎通がうまくいかなかった面も見られた。特に第３日目夜のプログラムについては，事前に申し出ていたことがインストラクター側に充分に伝わっておらず，インストラクター側から「当日いわれても困る」とおしかりを受けてしまった。

コミュニケーション・キャンプは教員・ホテル・インストラクターの意思疎通を図ることが大切である。打ち合わせの時間に手を抜かず，慣れてきた面を生かして質の向上を目指したい。

一方，個人から周りの人へ，周りの人からグループへ，そしてＨＲへとコミュニケーションの場を広げ，生徒たちはよく活動した。「ＰＡ」や「mission impossible」など，生徒がみんなで考えて，適材適所に割り振ったり，行動したりするなど協力姿勢が見られた。良く考え，行動する大切さを学んだようである。また，男子が率先して各プログラムに取り組んでいたのが嬉しい。大きな目標である「コミュニケーション能力の育成」はまずまず達成できたのではないだろうか。

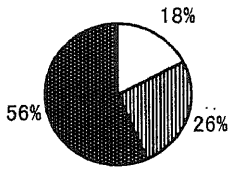
体調面が危惧される生徒もいたが，無事キャンプを終えることができた。アンケートの結果からも，全体としてはとても良いキャンプだったと思う。今後充分に考えていかなければならないことは，このキャンプでうまくコミュニケーションすることができなかった生徒のフォローをどうするかということであろう。

最後に，今年の３泊４日は木曜日～日曜日の日程であったが，引率者の半数が翌日の月曜日に出勤した。引率者全員が代休を取れるように日程を工夫する必要がある。

資料１

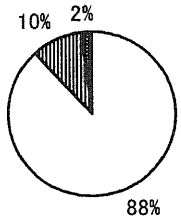
実施後生徒アンケートの結果　No.１

１．キャンプに行く前はどんな思いでしたか。



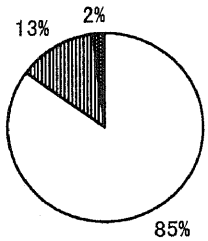
□ぜひ行きたいと思った
▥何とも思わなかった
■できれば行きたくないと思った

２．実際に行ってみてどうでしたか。



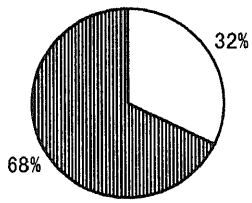
□行って良かった　▥何とも思わなかった
■行かなければ良かった

３．来年の一年生も体験した方が良いと思いますか。



□思う ▥どちらでも良い ■思わない

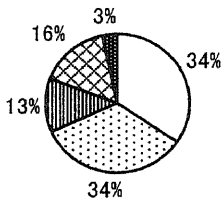
４．キャンプに行く前に目標はありましたか。



□あった ▥ない

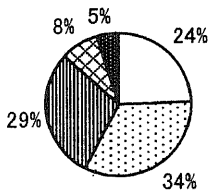
５．キャンプ中のいろいろな活動はどうでしたか。

（１）アイスブレーク



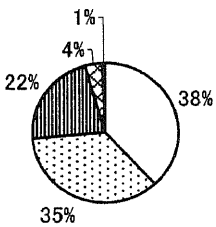
□良かった　□まあまあ良かった
▥どちらでも　▨あまり良くなかった
■良くなかった

（２）副校長の講義



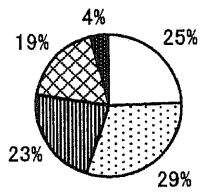
□良かった　□まあまあ良かった
▥どちらでも　▨あまり良くなかった
■良くなかった

（３）ホテル支配人の講義



□良かった　□まあまあ良かった
▥どちらでも　▨あまり良くなかった
■良くなかった

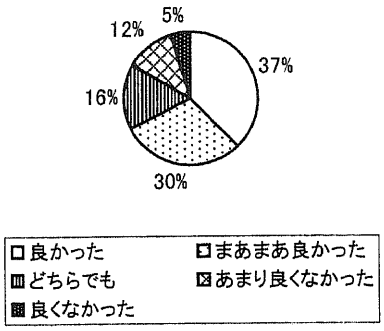
（４）テーブルマナー講習



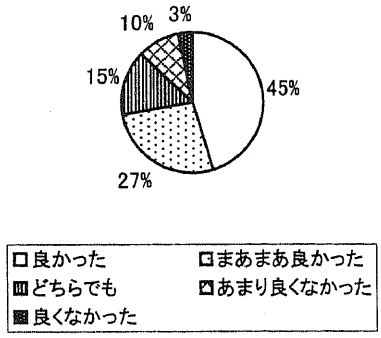
□良かった　□まあまあ良かった
▥どちらでも　▨あまり良くなかった
■良くなかった

実施後生徒アンケートの結果　No. 2

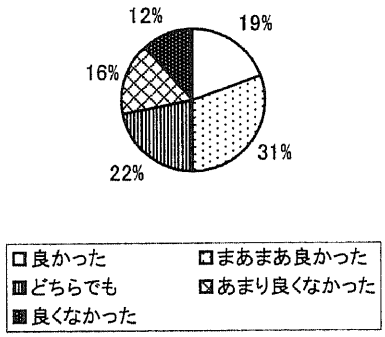
(5)エコハイキング



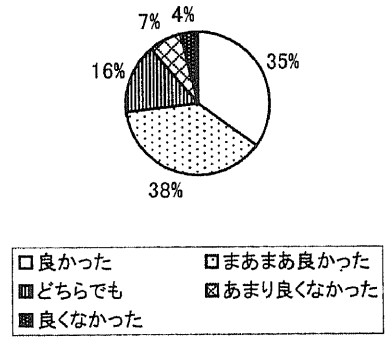
(6)PA



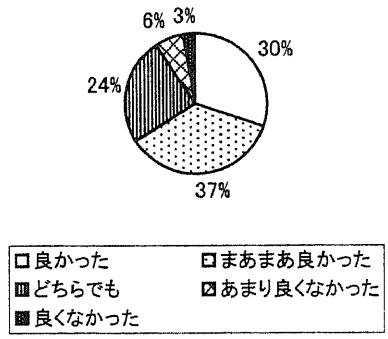
(7)MTB

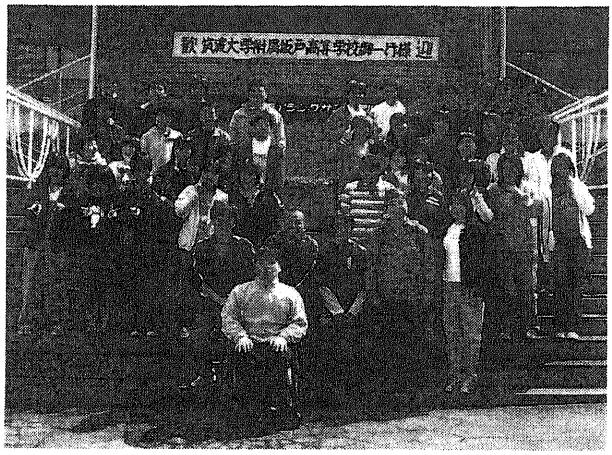


(8)Misssion Impossible



6. 宿泊したホテルはどうでしたか。




歓 筑波大学附属坂戸高等学校御一行様 迎

歓 筑波大学附属坂戸高等学校御一行様 迎

歓 筑波大学附属坂戸高等学校御一行様 迎

歓 筑波大学附属坂戸高等学校御一行様 迎